福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

福井大学連合教職大学院における国際展開の自身の経験を跡づける：2014年～2019年の取り組みのなかで

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 半原, 芳子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10866

福井大学連合教職大学院における国際展開の自身の経験を跡づける

2014 年～2019 年の取り組みのなかで

半原　芳子

Ⅰ. はじめに

筆者は 2013 年 10 月に、福井大学大学院教育学研究科［福井大学教職大学院］(2018 年 4 月より福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科［福井大学連合教職大学院］) に着任した。着任する前までは、主に財団法人で日系企業の外国人社員の日本語教育に取り組み、NPO 活動として外国にルーツを持つ子どもの学習支援を行ってきた。そのような日本語教育および多言語多文化共生教育を足場とする筆者にとって、福井大学教職大学院における教師教育改革の取り組みは非常に新しいものであった。半原（2014）では、着任後の半年間の自身の経験や葛藤を記している。

福井では、多言語多文化共生の取り組みも継続して行っている。福井における外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトも、丸 5 年となった。この間その展開を、拙い表現ではあるが記録として書き残してきている（半原・柴岡 2015, 半原 2016, 半原 2017, 半原 2018)。記録を書くことを通じ、自分の実践を掴み直すことができること、そして実践を発展させることができることを実感している。しかしながら、私がずっと書くのをためらっていた福井における取り組みがある。それは、福井大学連合教職大学院の教師教育改革グローバリゼーション（以下、国際展開）である。

私は着任以降、福井大学連合教職大学院の国際展開の動きに、かなり近いところでかかわる機会をいただいている。正直そこにかかわることには、躊躇いがあった。足を踏み入れると巨大な渦のなかに巻き込まれ戻れなくなるような怖さから、小さくない抵抗を感じ続けていた。しかし今、この国際展開の取り組みが、自身の大事な実践の一つであるという自覚と責任が自分のなかに育ちつつある。今も躊躇する気持ちはあるが、もう一歩を踏み出すためにも、まとまらないメモになるかもしれないが、これまでの自身の国際展開にかかわる経験を書き記しておこうと思う。またこの記録が、微力ながら今後国際展開にかかわるメンバーの理解の土台になればと願う。

なお、ここで記述される内容は、私の着任以降のものであり、かつ私が認識および経験しているものに限られている。私が着任する前から、すでに福井大学連合教職大学院では国際展開に向けた舵が切られていた。また、ここでは触れていない OECD 日本イノベーション教育ネットワーク（Japan Innovative School Network supported by OECD）福井クラスターの展開や（木村 2017)、2017 年に開催された世界授業研究学会（WALS） における Lesson Study Immersion Program （For Global Collaboration Cultivating Professional Learning Communities 編集委員会 2018)、そして 2018 年からのシンガポール National Institution of Education（NIE）との国際インターンシップ（王 2019）等がある。

Ⅱ. 海外の教育者が福井大学教職大学院の教師教育改革に参画し始めた時期に立ち会う(2014 年～)

私にとっての国際展開の最初の出会いは、Mangulabnan Pauline さんとの出会いである。Pauline さんは、現在は本学連合教職大学院のコーディネートリサーチャー（非常勤スタッフ）であるが、2014 年 10 月に研究留学生としてフィリピンより来日し、2015 年 4 月に福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した。Pauline さん

が留学先として福井大学教職大学院を選ぶきっかけを作ってくださったのは、当時本学にて数学教育に取り組んでいらっしゃった佐分利豊先生である。数学教師であるPauline さんは、海外の学会で佐分利先生に出会い、それが縁で福井大学教職大学院の取り組みを知ることとなる。Pauline さんは入学後、福井大学教育地域学部附属中学校（現・福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程）で教育実践を行いながら、我々と協働探究を進めている。

2017 年 10 月、研究留学生として、ミャンマーのヤンゴン教育大学の教員で英語教育が専門の Naing Win Soe さんが来日する。Naing さんはミャンマーの学校で英語を教えていた経験があり、その経験を活かし、高等教育機関における教員養成および教師研修のあり方を考えたいと福井にやって来た。Naing さんは 2018 年 4 月に福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学し、Pauline さんと同じく現在附属後期課程で教育実践を重ねている。

また、この間、研究留学生とは異なる枠組みで、海外の学校教員が福井大学連合教職大学院の取り組みに参加してくれている。「教員研修留学生」は、海外の現職教員が最大 1 年半国費留学生として日本の大学院で学べる制度で、その教員研修留学生として、2014 年 10 月にエジプトから Sameh Mostafa Samaha Elhalawany さん、2015 年 10 月にインドネシアから Mala Rejeki Manurung さん、2016 年 10 月にオーストラリアから Christie Abel さん、コロンビアから Oscar Mauricio Rodriguez Estupinan さん、2017 年 10 月にインドから Sonaleeca Das さん、ブータンから Ugyen Dorji さん、そして 2018 年 10 月にグアテマラから Lucia Arrecis さんが来日し、我々と協働探究を行ってくれている。

私自身かれらから非常に多くのことを学んでいる。2016 年に、当時長野県教育委員会との交流人事で本学教職大学院に勤務されていた宮下哲先生と一緒に、Pauline さんおよび教員研修留学生との学びを以下のようにニュースレターに記している。

修士 1 年目を終えようとしている Pauline さん（フィリピン）も，教員研修留学生として 1 年半の研修を行っている Samaha さん（エジプト），Mala さん（インドネシア），Andrew さん（リトアニア）も，ほとんど日本語を習得していない状態で福井での学修を始めたのだが，言語の違いを超えた学びを得ておられるように思う。その要件はいくつかあるのだろうが，最も大きいのは「具体的な実践を共有した上で行われる省察の積み重ね」ではないかと思う。

洋の東西を問わず，目の前で学ぶ子どもの姿とそれを支える教師の生の姿に接すると，各自が前提としている物事を問い直さずにはいられなくなる。あるいは，目の前の実践に触発されると，自国の現状を鑑みながら，帰国後に取り組む展望や可能性を探らざるを得なくなる。また，その挑戦的な取組を実現するための覚悟をもたざるを得なくなる。さらに，そのような取組を継続する内に，語られる内容には言葉や習慣などの差を超えた共通項が多いことに気付くようになると，困難に立ち向かうための勇気が湧いてくるからだと思う。

（福井大学教職大学院ニュースレターNo.80［2016.2.13］より）

さらに、2016 年 4 月に、アメリカから Elizabeth Sugino Hartmann 先生が着任された。Hartmann 先生はアメリカで数学教育研究に取り組んでこられており、2 年間という短い期間ではあったが、本学教職大学院の国際展開の中核を担ってくださった。具体的には、OECD 日本イノベーション教育ネットワーク福井クラスターの国際担当をされ、また 2016 年から始まった JICA 課題別研修 Knowledge Co-Creation Program（後述）に率先してかかわってくださった。

外国人教員としては、2017 年 4 月に中国出身で英語教育がご専門の王林鋒先生が、2018 年 9 月にはエジプト出身で日本語教育がご専門の Yasmine Samy Gamal Eldin Mostafa 先生が着任され、国際展開を支えるメンバーの層が一層厚くなった。

Ⅲ．世界の教育改革が同じ方向性を向いていることに気づき、同じ地平に立つ海外の教育者たちの取り組みから学ぶ

1．JICA 課題別研修 Knowledge Co-Creation Program が始まる（2016 年～）

海外の教育者たちが福井に集まり始めるなか、2016 年度より独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）が行う課題別研修の一つである Knowledge Co-Creation Program が始まった。それは 3 週間のプログラムで、初回の 2016 年度はアフリカの 4 ヶ国（エチオピア、マラウイ、ナイジェリア、ウガンダ）から 7 名の教育者が参加した。当時私は教職大学院着任 3 年目で、ようやく日本の学校教育の状況を理解し始めた頃だった。そのような私が、海外の教育改革のために一体何ができるのか不安に思ったことを今

でも覚えている。しかし、アフリカの先生たちから語られる内容は、日本が抱えている状況や困難といくつもの類似点があった。7名の先生方は教諭、地区のクラスターリーダー、ナショナルトレーナー等経験や立場、そして年齢も様々であったが、子どもたちのためにより良い教育を行うこととよい学校をつくることを心から望み、そのために自分たちを成長させ続けようとしていた。

初めて聞くアフリカの状況に自分の想像力が十分に働かず、また自身の英語力の拙さもあり、先生方のために自分ができたことなどほんの僅かだったと思う。しかし、世界の教育改革が同じ方向性を向いていることをアフリカの先生方の経験から実感を持って知ることができ、福井大学教職大学院の柳沢昌一先生をはじめとする日本人メンバー、そして Pauline さんや Hartmann 先生といった海外からのメンバーと一緒にこのプログラムを実践できたことは、私にとっての国際展開の「扉」とも言える重要な出来事であった。

2017年度、2018年度と本プログラムは継続され、参加されるアフリカの先生方の国や地域も増え、こちらのメンバーも上述のように厚みを増してきている。

2．アフリカラウンドテーブルの協働開催（2017年～）

2016年の JICA 課題別研修に参加したマラウイのナショナルトレーナーであるチャールズさんと、マラウイの中等学校で数学の教員をしているビクトリアさんが、帰国後自分たちの国でラウンドテーブルを行いたいとし、2017年10月に「マラウイラウンドテーブル」を協働開催する運びとなった。それはチャールズさんとビクトリアさんの、上意下達のカスケード方式の研修を変えていきたいという意思と行動によるものであり、私は幸いにもそこに立ち会う機会をいただいた。

このラウンドテーブルには、2017年 JICA 課題別研修に参加する予定の4名（中等学校教員、中等学校長、ナリクレ教員養成大学教員）を含む約30名のマラウイの教育者および教育関係者が参加した。私はマラウイラウンドテーブルに参加した感想を、当時以下のようにニュースレターに綴っている。

今回マラウイを訪ね教育改革に向けた試行錯誤を見聞きするなかで思ったことは、日本が直面している課題と大差がないということだった。おそらく世界のどこの国や地域も同じような課題に直面しているのだろう。教育改革のプロセスをつくりだすことは、まるで沼地を這うような大変なしんどさを伴うものである。しかし、今回マラウイの教育状況を少しでも変えていくためにチャールズさん、ビクトリアさんをはじめとするマラウイの教育者達は自分達のそれぞれの場所で地道な努力を積み重ねていた。その姿を見て頭が下がる思いであると同時に、彼らと同じ時代に生き切磋琢磨できることを心から嬉しく思った。マラウイの教育者達の「壮大な野心」に伴走し共に学び合えるよう、自分自身を成長させたい。

（福井大学教職大学院ニュースレターNo.104［2017.11.1］より）

このマラウイラウンドテーブルは、翌2018年にはマラウイの全国の中等教育の理数科教員が集まる研修会の一部として開催され、約300名規模での実施となった。先生方の多くは、5～6名の小グループで実践を語り合うラウンドテーブルのスタイルに初めは戸惑っていたが、次第に顔を寄せ合い、膝をつきあわせ、自分たちの学校の生徒の様子や自身の授業の工夫を自分たちの言葉で熱心に語り合いはじめた。その光景を見て、アフリカから何かが大きく変わっていく予感がした。

次回3回目となる2019年のマラウイラウンドテーブルは、近隣諸国のメンバーを加えた「アフリカラウンドテーブル」として開催する予定とのことである。マラウイをはじめとするアフリカの先生方の挑戦に、胸を躍らせている。

Ⅳ．世界の教育改革が自分事となり始める（2019年～）

自身の過去の経験と現在の取り組みがつながり始める

エジプト・日本教育パートナーシップ（2019年～）

ここでは、主に2019年1月よりスタートしたエジプト・日本教育パートナーシップ（Egypt-Japan Education Partnership: EJEP）における教員研修についてふり返る。前節の JICA 課題別研修と節を分け、本研修の意義を探ろうとする理由は、私個人の経験によるものである。

私は2001年から2002年までの1年間、エジプトの大学で日本語を教えていた経験がある。その前の2年間隣国ヨルダンで日本語教育に従事したものの、当時の自分は教科書の単語や文型を学生にリピートさせ暗記させることしかできず、日本語教師とは何か、そして日本語教育とは何かという大きな問いにぶつかっていた。ヨルダンでの2年間が終わるタイミングで、エジプトの大学で働く機会が舞い込み、場所を変えもう一度頑張ってみたが、やはり教科書の単語と文型を教えることしかできなかっ

た。ただ、このエジプトで出会った同僚の先生と学生からは本当に多くのことを学んだ。

日本に帰国し、日本語教師として働きながら大学院に通い、新たな日本語教育を模索した。そうしたなか、2011年にエジプト革命が起こり、エジプト社会が混乱と疲弊に陥った。テレビのニュースでかつて私が日本語を「教えていた」学生が映り、彼女は絶望を語っていた。その時、いくら新米日本語教師だったとはいえ、自分が彼女に行った未熟な日本語教育を心から悔やんだ。

大学院の恩師は、私のヨルダンとエジプトでの経験をご存じで、それが私の実践と研究の最大のモチベーションであることも知っている。エジプトの研修が始まる前、恩師に不安な気持ちを打ち明けた。恩師は、「自分の過去の経験と今の自分の取り組みがつながることは幸せなこと。それが（あなたが）生きているということなので、頑張りなさい」と背中を押してくれた。そうしたことを経て、私は福井大学連合教職大学院が取り組む、エジプト・日本教育パートナーシップのプロジェクトに参加する機会をいただいた。

2019年1月31日、EJEPにおける教員研修がスタートした。具体的には、エジプトで新たにつくられているエジプト日本型学校（Egyptian Japanese schools: EJS）に勤務する先生方が参加するものであり、国内での研修期間は6週間である。福井大学連合教職大学院では、EJSの先生方と21世紀の学習のデザインとプロセスを、協働探究を通じ学んでいくことに取り組んだ。

今回第一バッチとして来日した先生方は、EJSで管理職を担うメンバーを中心とした「マネジメントコース」の21名と、EJSの初等クラスを担当している先生方を中心とした「アクティビティーコース」の21名であった。研修期間は6週間で、私は主にアクティビティーコースの先生方の学習に同行することとなった。

アクティビティーコースの先生方は全員女性で、年齢は30代前後の方が多く、EJSの前に1〜2校別の学校で勤務経験のある方が多かった。21名は、ホームグループとしてP・Q・Rの3つのグループ（7名×3グループ）に分かれ、ホームグループ（全7名）およびアクティビティーコース（全21名）、そしてマネジメントコースの先生方と共に（全42名）で、協働探究を行った。なお、マネジメントコースの先生方も同じようにホームグループとしてA・B・Cの3つのグループ（7人×3グループ）に分かれ、協働探究を行った。

ここでは、私が特に同行する機会が多かったアクティビティーコースのQグループの7名の先生方の学習過程および自身の気づきを、研修中に書き取ったメモをもとに辿り、本研修をふり返る。なお、マネジメントコースについては、淵本（2019）に学習過程が記されている。

Cycle0（1/31〜2/2）　多様な実践に出会う－三つの種、東京都板橋区立金沢小学校および長野県伊那市立伊那小学校訪問－

研修は、東京でスタートした。初日は、本学連合教職大学院およびこれまでの国際展開プログラムにおいて大事にされている「三つの種」からスタートした。私はかつて日本語教師として日本語を教えていた時、「自分から出発すること」を基本に、自己紹介を大切にしていた。本学教職大学院でこれまで幾度も「三つの種」に立ち会うなかで思うのは、それは「実践者」としての自己紹介であるということだ。「三つの種」では、現在に至るまでの自分の歩みを自分の言葉で語り、そして今の自分の状況を自分の言葉で探っていく。Qグループの7名の先生方は「三つの種」で、EJSの前の前任校での辛い経験を語ったり、特別な支援を必要とする子どもたちとのかかわり方が分からないと吐露したり、EJSがスタートしたもののどのように授業づくりをしたらよいか、また保護者とどのようにEJSの教育を共有したらよいか思考錯誤している等を話していらっしゃった。一人一人状況の違いはあるものの、EJSという新しい学校づくりに向け、期待と意欲いっぱいであることは7名の先生方全員に共通していた。

翌日（2/1）は、東京都板橋区立金沢小学校を、翌々日（2/2）は長野県伊那市立伊那小学校を見学した。私はQグループの先生方と行動を共にしながら、先生方がどんなところに関心を持っているのかを探っていた。また、多様な実践に出会うなかで、先生方の関心がどのように広がっていくのかを捉えたいと思っていた。

金沢小学校では、教室の壁や廊下に、子どもたちの作品がいっぱい掲示・展示されており、先生方はそれら一つ一つを感心した様子で見入っていた。また、きれいに清掃されたトイレや、子どもたちが一目で自分の役割が分かる給食当番表などをカメラにおさめていた。そして、活動をメインとした授業では、子どもたちに誘われ、一緒に昔の遊びをしたり歌を歌ったりして、子どもとかかわることを心底楽しみながら日本の学校に触れていた。

伊那小学校は、公開学習指導研究会への参加であった。総合学習・総合活動を中核に据えた教育課程を編んでいる同校で、Qグループの先生方は、午前は「もやし工場づくり」をテーマにもやしを育てている2年山組の授業を中心に参観し、午後はアヒルが安心して卵を産める環境

づくりに取り組んでいる 2 年川組の授業を中心に参観した。また、特別支援学級に関心のある先生もいたため、特別支援学級も参観した。私は通訳のサラさんを通じ、子どもたちの学習プロセスに価値を置きながら、目の前で行われている子どもたちの議論の内容を伝えたり、教室に掲示されている子どもたちの学習記録を紹介したりした。後の質問タイムで、先生方からは「特定の教科書があるのか」、「プロジェクトのテーマはどのように決まるのか」、「どのような基準で特別支援学級に入る子どもが決まるのか」、「子どもたちの活動をどのように評価しているのか」等の質問があった。

Cycle 1（2/4〜2/8） Learning by Doing Active Learning
「主体的・対話的で深い学び」のデザインとプロセスを探る

Cycle0 として第 1 週目に東京と長野で多様な日本の学校の実践に出会った後に、福井でのサイクルがスタートした。福井における初発のサイクルとなる Cycle 1 では、「主体的・対話的で深い学び」のデザインとプロセスを探ることがねらいとされた。新たな学習のデザインとプロセスを探ることは、自分たちのこれまでの学び方を変えていくことを抜きにしては実現できない。前週の Cycle 0 でもそこは意識されていたことではあるが、Cycle 1 で改めて柳沢先生から EJS の先生方に、先生たちのなかでファシリテーターを立て、自分たちの問いを自分たちで探り深めることが提案された。

2/4（月） 自分の見方や考え方を発展させるための記録に取り組む

柳沢先生より、Cycle 1 の初日の活動として、金沢小学校と伊那小学校を見学しての印象や感想、考えを記録にしていくことが提案された。記録は自分がこれまで時間をかけて築いてきた思考や物の見方、考え方を、新たな経験やそこから考え始めたことを編み込みながら、これまでとは違う価値観や新たなパースペクティブを手に入れるための大切なツールとなることは、私自身この 5 年間の経験のなかで実感できている。柳沢先生は「持続的な探究とそれを支える記録」とおっしゃっていたが、その通りだと思う。

Q グループの 7 名の先生方の記録には、次のようなことが書かれていた。箇条書きではなく、ストーリーで書いてくださっている先生もいたが、通訳のサラさんを通じ、先生方が書いている内容を断片的に教えてもらったため、ここでは箇条書きでの共有となることをご容赦いただきたい。

＜金沢小＞
- 子どもたちが歓迎してくれて嬉しかった
- 体操着で寒そうに見えたが、子どもたちは元気に取り組んでいた
- 子どもたちは掃除や給食の時に自分の役割を理解していた
- 話し合いで学習を進めていた
- 音楽の授業で昔のいろいろな遊びを行っていた
- 給食で余った果物を、ゲームを通じ分け合っていた
- 校長と副校長が協力し合っていた
- 保護者の参加があった

＜伊那小＞
- 自分で考えたことを発表していた
- 子どもと教師が共に学習する学校であると感じた
- 地域社会が学校を支えている
- 公開研究会が学会のような様子だった
- 子どもたちは植物や動物をよく見てメモを取り、成長するよう環境を整えていた
- クラスの名前がその学級で取り組んでいる内容を表しているようだった
- 教室がラボラトリーのようだった
- 子どもたちの座り方が U の字だった

＜全体＞
- 学校が子どもにとって安全な場所だった
- 保護者にも役割があった。エジプトには保護者への便りがない
- 毎月学習の計画（体育、掃除、マラソン等）が立てられ、それが保護者とも共有されていた

こうした記録をもとに、Q グループの先生方は自分たちの問いとして、「子どもたちに自分の役割を意識させるにはどうしたらよいか」、「教師の役割はどのようなものか」、「（日本の）先生たちはどのように特別活動（以下、「特活」と記す場合もある）を意識しているのか」、「保護者の参加をどのように促していけるのか」等を挙げていらっしゃった。

この日は、本学連合教職大学院の木村優先生より OECD Education2030 の枠組みが紹介され、午後は持続的な協働探究的学習のデザインを探るため、実践記録「あそぶものをつくろう」（『改訂小学校学習指導要領の展開 生活科編』より）を読むことに挑戦した。

2/5（火）子どもたちの主体性に触れ、教師の役割を考え始める

この日は朝から、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程を訪れた。前期課程 1 年生の子どもたちと、この 4 月に前期課程に入学する附属幼稚園の園児たちとの間で「わくわく交流デー」が行われており、そこに立ち会う機会を得た。前期課程 1 年生の子どもたちが、前期課程に入ってからの 1 年間の自分たちの経験を園児たちに紹介し、手作りのゲームで一緒に遊んだり、歌を披露したりした。エジプトの先生方は、「子どもたちが責任を持ち全部自分で行っている」ことに驚き、「先生があまり前に出てこない」ことや、「園児の保護者がいるにもかかわらず、園児は保護者のところに行かず、しっかり交流に参加している」様子を見て取りながら、一緒に同行していた本学連合教職大学院の中島健先生に、「どのように子どもたち同士を協力させるのか」と質問していた。中島先生は、「子どもたちにとって楽しいことを行うことや、子どもたちが同じ目的を持つことを支援すること」、そのためにも「担任同士のコミュニケーションが大切であること」等を、ご自分の経験をもとに話していらっしゃった。午後は給食参観、清掃参観を行い、2 年生の社会創成プロジェクトを見学した。そこでは町探険で調べたお店の紹介を、子どもたちがグループで、ポスターで発表していた。

この日のふり返りでは、アクティビティーコースの先生方の関心は、主に給食や清掃のことに集中した。「協力して、とても静かにきれいに掃除を行っているのは素晴らしい」、「掃除の役割は誰がどこを行うのか」、「給食の時みんな列に並んで規律を守っている」、「給食の分担は誰が決めるのか」といった感想や質問が出された。社会創成プロジェクトについても、「子どもたちが建設的に意見を述べ合っていた」様子を見て取っておられ、「どのグループがどの店に行くなど、どう決めたのか」といった学習デザインについての質問があった。また、今もなおチョークが使われていることに驚いていた。

2/6（水）問いの広がりと葛藤のなか方向性を吟味する

この日の午前は前日に続き、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程の授業を見学した。1 年生から 6 年生までの縦割り活動と、理科（5 年 2 組）、道徳（3 年 1 組）、国語（2 年 1 組）の参観を行った。縦割り活動では、各学年 1〜2 名によるチームで、フリスビーや風船テニスなどを行っていた。その様子を見て、「縦割りの学級会があるのか」、「ゲームを決めるのは誰なのか」といった質問があがっていた。それぞれの授業の見学では、先生たちの役割や工夫に注目していた。「先生が教えるというよりも、子どもたちが推測して、それをみんなで共有している」様子や、「自分で記録を書いて、それからグループで話し合っている。この研修と同じ構造」といった、子どもたちの学習と自分たちが現在進めている学習の共通構造を見て取る先生もいた。

そうした問いを重ねながら、午後は特別活動研究会の第 1 回目として、アクティビティーコースの先生方には本学連合教職大学院の岸野麻衣先生より、「新学習指導要領 第 6 章特別活動」を踏まえ、特別活動にかかわる提起が行われた。そこでは、まず、特別活動の大きな目標および 4 つの領域（学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事）と、指導計画として「児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図る」こと、「各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間などとの関連を図」ることが新学習指導要領で提案されていることが確認された。そして、これまで見てきた金沢小学校、伊那小学校、附属義務教育学校の取り組みが参照可能であることが提案された。エジプトの先生方が EJS ですでに取り組んでいらっしゃる特別活動を踏まえた上で、これからそれぞれの学校・学級でどのように発展させることができるのかを一緒に考えたいという思いからの提案である。これまで金沢小や伊那小、そして附属の社会創成プロジェクトに立ち会いながら先生方が問いを広げたり、時にご自分たちが EJS で取り組んでいる特別活動のフレームで子どもたちの様子を見ようとしたりと、よい意味での「揺れ」を経験している先生方にとって、このタイミングでのこの提案は、先生方が次のパースペクティブを掴むための梯子となるものであったと思う。この後、各自で実践記録「あそぶものをつくろう」を読み、子どもが活動を発展させていく様子を自分たちなりに掴みながら、この日の学習を終えた。

2/7（木）教員の力量形成や協働に関心を寄せる

この日は、マネジメントコースの 3 グループ（A・B・C）とアクティビティーコースの 3 グループ（P・Q・R）がそれぞれ分かれ、福井市の公立小学校（円山小学校、和田小学校、宝永小学校、啓蒙小学校、中藤小学校、森田小学校）を訪問した。私は Q グループの 7 名の先生方と、柳沢先生、通訳のサラさんと一緒に中藤小学校を訪問した。朝 7 時半から子どもたちの集団での登校の様子を見るところから始まり、朝の会、授業参観（2-1 音楽［あいさつの歌］、3-1 総合［町の調査］、3-3 音楽［専科の先生の楽器の授業］）、そして校長先生からの学校概要の説明、大休み参観、給食の見学等、一日学校の様子を見せていた

だいた。

この中藤小学校の訪問は、これまでの学校訪問のなかで、おそらく一番地域との連携が目に見える訪問だったように思う。具体的には、子どもたちの登下校をサポートする地域の方たちの様子を見ることができ、また教頭先生が校内を案内してくださるなかで、図書館が夕方は児童クラブの場所として使用されていることや、休日に体育館が地域の人に解放されていること等を教えてくださった。子どもが育つ学校が地域のなかにあること、そしてその学校は地域のためにもあり、保護者や地域の人と連携しながら学校が多様な役割を持っていることを、この時エジプトの先生方は強く感じ取っていたと思う。その後の西村校長先生との交流の時間のなかでも、地域との連携について、「どのようにボランティアを募集しているのか」、「教員と保護者が直接連絡を取り合えるのか」等の質問があがっていた。その他にも、学費のことや総合のテーマ決めのこと、非常勤の先生の資格のこと、教員評価のこと、教員研修のこと、有給のこと、そして教員同士のコミュニケーションのことなどを尋ねていらっしゃった。

このように当時のメモを読み返してみると、この時のエジプトの先生方の質問の多くは、教員に関するものに集中していることに気づく。おそらく学校が地域とともにあるためには、教員の力量形成や協働が大事であるとの感覚を先生方が掴んでいらっしゃったからだと思う。最後に西村校長先生がエジプトの先生方に、「学校がチームであること」が大事であると伝えていらっしゃったが、エジプトの先生方はこの言葉を心からの納得をもって受けとめていたと思う。

2/8（金）ここまでの自身の探究を前向きに表現する

Cycle0 と Cycle1 において、日本のいくつかの学校を訪問し、実際の活動や学習の様子を見てきた。この日は、これまでの訪問のなかで印象に残ったこと、考えたこと、そしてそことかかわる自身の学習の歩みを記録（レポート）にし、それを後半各コースにてクロスセッションを行い、報告した。先生方は、初日の「三つの種」から出発した本研修におけるご自身の探究の歩みを記録にすること、その歩みをクロスセッションで語ることに、とても前向きであった。あいにく私はアラビア語が分からないため、通訳さんを通じレポートの内容やクロスセッションでの内容を断片的に知ることしかできなかったが、幸いQグループのヒンドさんのふり返りを、本学連合教職大学院のヤスミーン先生の通訳から、以下のように知ることができた。

- 附属の「わくわく交流」で1年生が幼稚園児に花の種をあげていた。あんなに小さい1年生が歌を上手に歌えていて驚いた
- 先生たちが専門家としての研修を受けている印象がある
- 子どもたちが自分で努力して作品をつくる楽しさを味わっている
- 先生の役割がファシリテーターである
- 子どもたち同士で情報交換をしている
- 先生たちがまわりの先生のことを考えながら行動している。協働しながら交流しながら進めている
- 子ども同士があたたかい雰囲気をつくりながら行動している
- 子ども同士のコメントがポジティブである
- 学校と地域が連携している。中藤小学校では体育館や図書館が地域に解放されていた。そのお返しに地域が見守り活動を行っている
- 中藤小学校の総合学習は附属と同じ構造を持っている。そのため2つの学校は交流できる。
- 「学校で一番好きなところは図書館」という子どもの返答に感動した

Cycle0 と 1 をふり返って

自分の当時のメモをもとに、Cycle0 と 1 の、主にアクティビティーコースQグループの先生方の探究を、自身の印象や感想を交えながら跡づけてみた。実際のところ事実の羅列になっている部分は否めないが、書きながら当時の状況がありありと思い出されるだけではなく、どうして（EJS の先生方が、そして私が）そういう場面が印象に残っているのか、どうして（EJS の先生方、そして私が）そのことを大事にしようとしているのかを考える機会となっている。

私には私が大事だと思っていること、関心を寄せていることがある。例えば、地域との連携がその一つである。ただ、今回 EJS の先生方の探究に同行するにあたり、そうした自分の意見を前面に出すことは、言葉の問題もあったが極力控えるようにした。まずは先生方のエジプトでの状況、そしてこれまでのご経験のなかで耕されてきたお一人お一人の考え方や価値観を大事に聴き取ることを心がけた。

Q グループの通訳のサラさんの存在は、非常に有り難かった。東京外国語大学の研究生であるサラさんは、私と一緒に先生方の状況を一生懸命探ろうとしてくれ、先生方が考えていることをサラさんのなかで大事か大事でな

いかを判断せず、そのまま私に伝えてくれた。本学連合教職大学院のコーディネートリサーチャーであり、玉川大学の教員でいらっしゃる石井恭子の存在も大きかった。私が席を外さざるを得ない時は、石井先生が代わりにメモを取ってくれた。このように、今当時の記録をもとに探究のプロセスを辿ることができているのは、石井先生の記録のおかげでもある。

「Learning by Doing　Active Learning 『主体的・対話的で深い学び』のデザインとプロセスを探る」探究は、私たちが主体的・対話的で深い学びを実現しようとすることで成されるが、Cycle0 と 1 を通じ、その構えが、そしてそのための関係性が、先生方の間で、私のなかで、ゆっくりと、まるで足場を組んでいくように構築されていったように思う。そして、そのこととかかわりながら、はじめは「あれもこれも」であった問いが、次第に位置関係をとりはじめ、重要性の度合いが吟味されていったように思う。

Cycle 2 協働探究の長期的な展開プロセスとそれを支える教師の専門職学習コミュニティ

Cycle2 では、Cycle0 と 1 で考え進めてきた子どもの協働探究の長期的な展開プロセスに加え、それを支える教師の協働探究の長期的な展開プロセスとそれを支える教師の専門職学習コミュニティへの展望を拓いていくことがテーマであった。週末にゆっくり休みをとってからの、Cycle2 の開始であった。

2/11（月） 長期に渡る探究的学習の要素を掴もうとする

先週の金曜日のクロスセッションでの熱気がまだ感覚として残っているこの日は、クロスセッションのふり返りから始まった。クロスセッションで終わりとせず、次の探究に向かうためにふり返る。これは正直ややしんどいことである。しかしながら、このふり返りは次の探究に向かうために非常に大事であり、それを行うか行わないかで探究の深まりが違ってくる。行わなければ、同じ問いのなかでぐるぐると旋回し続けるだけかもしれない。

Q グループのふり返りでは、Q グループにおける自分たちの探究が、「問いが定まっていないものだった」ことが話題となった。他のアクティビティーコースのメンバー（P グループ、R グループ）の記録やふり返りから、そのように思ったらしい。「ポイントを絞ることが大事」（イシュラクさん）、「ポイントが押さえられなかったのはチームのなかにいろいろな問いがあるからこそ。でも、これからは絞っていきたい」（ヒンドさん）、といった意見が交わされた。途中、先生方が殊更熱心に議論をし始めた。通訳のサラさんによると、先生方は、EJS での子どもたちの学習として、今消えつつあるエジプトの文化を継承するプロジェクト、例えばエジプトの伝統的なチーズの作り方を復活させる等のアイデアを出し合っているとのことだった。自分たちの EJS でできる Learning by Doing、そして Active Learning を具体的に探り始めている先生方の様子に、月曜日の朝から元気をもらった気分であった。サラさんは、クロスセッションで先生方がいろいろな人の意見を聞くなかで、自分のなかでやりたいことが想像しやすくなった様子であること、先生方が学校（EJS）のまわりのこと、地域の人のことを考え始めていることを教えてくれた。また、サラさんは、他のグループの先生方の報告では、クラスに入ることができない子どものことは話題になっていなかったが、Q グループの先生方は中藤小学校で玄関から入れない子どもが玄関横にある保健室から入ることができる仕組みに注目していたことを例に挙げ、Q グループの先生方の関心の特徴として、クラスに入れなかったり病気をしたりしている子どもへの配慮の仕方があるのではないかと、私に伝えてくれた。その他、ふり返りにおいて、Q グループの 7 人の先生方は、「どうして日本の教育がこんなに発展しているのか」を話し合っていた。それについて、「先生たちがカリキュラムを変える柔軟性がある」、「授業や活動において、地域住民とかかわっている」、「勝ち負けの競争がない」といった見方が出し合われていた。

この日は、岸野先生より、省察的かつ重層的な持続的学習と、それを支える教師の授業研究についての提案（20 分ほど）があった。その提案を聞きながら、これまでの伊那小や附属での見学、読んできた実践記録「あそぶものをつくろう」、書いてきた自分たちの記録、そうした経験が改めて、実感を持って意味づけられたように感じた。午後は、その提案を受け、グループでのディスカッションの後、実践記録「スズメノカタビラの生態を探究する（理科・1 年）」（『学びを拓く《探求するコミュニティ》第 1 巻 学び合う学校文化』より）と、ドナルド・ショーンの『Educating the Reflective Practitioner』の「Reflection in Action」のパートをじっくり読み、感想を交わした。以下は、主に「スズメノカタビラ」を読んだ Q グループの先生方の感想である。

・子どもたちはいろいろなグループに分かれて実験している。先週金曜日自分たちが行ったクロスセッションのような中間発表があり、そこでリフレクションが行

われている。

・先生の「先輩が作ったものを参考にしてください」というのがよい。クラスだけではなく先輩のものがあり参照できるのが良い。
・クロスで自分たちの考え方より、良いものに出会っている
・先生が自分の意見を押し付けるのではなく、子どもたちに考えさせている。意見が違っていても尊敬し合うこと。スズメノカタビラで水分が多い、少ないという意見。違っていても尊重し合う。正解がないのが良い。正解がないので探究し続けることができる。
・「あそぶものをつくろう」では、一人一人が取り組んでいてよかった。スズメノカタビラは自分たちのまわりにあるものだから、グループで取り組める。「あそぶものをつくろう」ではどんな車をつくりたいか、子ども一人一人の発意。どちらの実践記録の実践も、子どもが主体的になぜかを問うているのが良い。
・先生の役割がファシリテーター

この感想から、先生方が実践記録を非常に丁寧に検討しているのが分かる。そして、この時点において、先生方が長期に渡る探究的学習の要素となるものをすでに掴んでいらっしゃることも分かる。

2/12（火） 子どもたちの探究を目の当たりにする

この日の午前中は附属幼稚園を見学し、午後は附属幼稚園の斎藤弘子園長のお話を聞き、その後斎藤園長との間でのQA、そしてふり返りを行った。アクティビティーコースの先生方は、現在EJSで同じ年齢の子どもたちの教育にかかわっているため、この日の見学とディスカッションはとても熱がこもっていた。

見学の際、3歳児は附属特別支援学校の子どもとの交流、4歳児は自由遊び、5歳児は外と中に分かれて遊んでいた。エジプトの先生方はEJSで同じ年齢の子どもたちに教科（アラビア語、算数、道徳、英語、社会的概念［歴史等］、科学的概念、音楽、体育、美術）教育を行っているそうだ。そのため、目の前で広がる「遊び」を通じた子どもたちの伸び伸びとした学びに、先生方は、初めはにわかに信じがたいといった様子だった。砂場で遊んでいる子ども、先生と大なわとびを楽しむ子ども、植物を観察する子ども、室内で友達とアクセサリーショップを作っている子ども･･･。子どもたちは園内を縦横無尽に駆けまわりながら、思い思いの遊びを創造し、楽しみ、そしてその遊びを発展させていく。また、部屋には子どもたちの作品がたくさん飾られている。それらを見て、「教科がないのになぜ文字が書けるようになるのか」、「教科がないことに驚くが、先生たちは何人いるのか」等質問していた。エジプトの先生方は、子どもたちの様子をじっくり観察し、葛藤しながらも遊びの意味を見出そうとしていた。外での子どもたちの遊びの様子を観察していたQグループのユスティナさんが、その後のグループでのふり返りでこのように述べている。

「子どもは泥だんごが作れる土と砂の性質を知っていた。草が生えているところではそれに適した遊びをしていた。幼稚園なのでブランコとすべり台があるだろうと思っていた。実際に見たら、子どもたちにとっての遊具はそれだけではなかった。葉っぱで料理を作っている子ども、バーベキューごっこをしている子ども。文字や絵を砂場に描いている子もいた。今日見学したなかで、自由遊びの時間が最も良い時間だった。自分が好きなこと、やりたいことを自由にやらせてもらっている。自分が好きなことなら自分一人でもいいと思っている子もいた。自分がやりたいことを自由にやらせてもらっていることに感動した。エジプトでは保護者が、これは危ない、あれは危ないと怖がりすぎてしまい、子どもが小さい時にいろいろな経験ができない。」

2/13（水） 長期に渡る子どもたちの探究に立ち会うなかで、アイデアが浮かび始める

午前は附属後期課程の授業見学（9年生音楽、8年生学年プロジェクト）の後、午後は特別活動にかかわる資料と、ウェンガーの『Cultivating Communities of Practice』の第3章を読み解いていった。特別活動の資料は、文部科学省から出されている具体的な説明と内容が紹介されたものである。『Cultivating Communities of Practice』には、コミュニティをどのように育てていくのか、3年から5年のプロセスが書かれている。後者においては、この日附属後期課程の学年プロジェクトに出会っていることから、先生方にいろいろなアイデアが生まれている様子だった。

2/14（木） 自身のアイデア（アクションプラン）を言葉にする

この日はCycle0、1、2で積み重ねてきた学習のふり返りを行い、記録を作成する日である。作成した記録をもとに、翌日のクロスセッションで報告を行う。今回の記録では、エジプトに戻ってからのアクションプランの案を書き出してみることも提案された。この日話し合われたQグループの先生方のアクションプランは、次のようなものである。

・地域住民を参加させたい
・スクールプランに保護者を参加させたい
・（附属の）社会創成プロジェクトをエジプトで行いたいがすぐには実行できないだろう。これからやりたい。
・ふり返りの会が大事
・修学旅行に保護者も参加させたい
・子どもたちに教えるのではなく、課題を与え考えてもらう教育をエジプトで伝えたい
・特別活動は授業ではなく理論であり、生活にある考え方
・子どもたちに自己評価をしてもらう
・縦割り活動をエジプトで行いたい
・子どもたちに自由を与え、正解がないことを教えたい
・附属幼稚園で見たような自由時間をつくりたい
・コンテンツよりもコンピテンシーという考え方を伝えたい。そしてエジプトなりのものをつくりたい。エジプトの特活をつくりたい
・先生が自ら今月の計画を立て、校長に見せるというやり方を伝えたい
・幼稚園では教科書をなくし、音楽や美術にフォーカスをあて、子どもに自由を与えたい
・福井大学のように大学も学校の活動に参加させたい
・学校を自分の才能を活かす場所にしたい

また、ワファーさんは私にこのようなことを伝えてくれた。「ここで勉強したことをそのまま伝えるのではなく、エジプトの文脈で工夫しながらやりたい」、「今までは『伝達』することをしてきた。だから失敗した。工夫することが大事」なのだと。

2/15（金）ここまでの自身の探究を跡づけ、展望を拓く

前日に作成した記録をもとに、クロスセッションを行った。先週のクロスセッション同様、マネジメントコースとアクティビティーコースそれぞれのコースのなかでのクロスセッションで、私はアクティビティーコースの方に参加した。私が入ったグループのメンバーは、シャイマーさん（P グループ）、ザハラさん（P グループ）、シャイマーさん（R グループ）、ラナさん（R グループ）、サラさん（Q グループ）の 5 名であった。通訳のハーガルさんがずっと私の隣で日本語に訳してくれたおかげで、この時のクロスセッションの先生方の語りの内容をかなり知ることができた。以下、少し長くなるが、記しておく。ハーガルさんはその時に私が分かることを最優先し通訳してくれたため、日本語訳が十分に練られていない部分もあるが、そこはご容赦いただきたい。

・シャイマーさん（P グループ）

11 日（月）は、岸野先生の講義から、授業研究に 4 つのモードがあることを知った。一番大事なのはモード 4。モード 1 とモード 2 は教員中心のものであり、モード 3 は教員の協働はあるもののある一つの授業や科目が中心であり、モード 4 になるとすべての教科がかかわってくると理解した。モード 4 では記録が特に重要となる。また、教師の役割も一方的に教科書にあるものを教えるのではなく、子どもたちの学習を支えるサポーターである必要がある。

12 日（火）の附属幼稚園訪問では、子どもの自由時間が多く、遊びながらスキルを発展させていっていると感じた。子どもなのに、遊びのふり返りを行っていて素晴らしいと思った。先生たちの姿から、サポーターとしての教師の役割について改めて考えることができた。学習のスパイラルについて、理解が進んだ。どうやって記録するのかも分かってきた。学習の発展のためには記録が重要。また、ふり返りを活かし、自分も教員として成長できることも分かってきた。

13 日（水）の附属後期課程の学年プロジェクトでの見学では、教育の最終的なあるべき姿、目標を見た思いがした。こんな生徒を育てたいと思った。学年プロジェクトで生徒たちが様々なグループで活動している様子を見て、グループワークの組織化も大事だと思った。エジプトで活かせるアイデアとしては、教員が成長できるよう教員同士の研究、研修が必要であるということ。その際記録を活かすことが大事。失敗を活かして研究が続けられるように。先生は教科書を教えるだけではない。サポーターとしての教師の役割を発展させたい。学校のスケジュールも変えなければならない。特活が全ての科目に入るようにスケジュールを変えていきたい。学校が発展するためには、教師が自分たちの経験を更新していかなければならない。

・ザハラさん（P グループ）

今週一番分かったことはスパイラル研究。エジプトに活かしたいタイプはモード 4 だが、できるかどうか。モード 4 を実現するためには、校長、教員、子ども、保護者の協力が必要。教員だけではなく全員の協力が必要。

驚いたのは幼稚園で読み書きを教えないこと。遊びのなかで子どもが書きたかったら教えるが、義務としては教えていない。幼稚園で、特別支援学校の子どもたちと一

緒に歌を歌うなど交流行事があるのが素晴らしいと思った。子どもたちが歌ったり踊ったりしていた時に、先生も一緒にやっていた。エジプトでは先生が一緒にやったら、子どもにしっかり教えていない、覚えさせていないから教員がやっていると否定的な目で見られる。エジプトでは考え方が日本とまったく違うので、どうやって受け入れられるか不安。

見学先での先生たちの様子を見ると、いつも子どもに「あなたはどう思う？」という質問だけではなく、「どうして？」と聞いている。エジプトでは成功させるための教育をなんでも行うが、日本では成功ではなく、子ども一人一人がやりたいことを活かして、そのスキルを発展させるために継続させる。考え方が違うし、やり方が違うし、目的も違う。日本は子ども一人一人の目的を発展させるために、エジプトは成功するためにやっている。でもみんなが成功するわけではない。エリートがいて、そうではない人がいて。日本では一人一人のやりたいこと、スキルが分かっていて、それを伸ばしていく教育を行っている。

ここにある子どもたち同士の協働にあこがれる。中学生は責任を持っており、主体性、積極性がある。それはすごいこと。子どもの頃からこのスキルを発展させているし、そのための研究が行われている。

アクションプランとしては、校長と教員と子ども、保護者、みんなの協力が必要。子どもをもっと自由にさせないといけない。子どもへのインプットだけではなく、子どもが持っているスキルを伸ばしていけるように。

・シャイマーさん（R グループ）

自分の考え方がかなり変わってきた。エジプトに戻って EJS の他の教員に、今の自分のアイデアを伝えたらどのような反応をされるのか少し不安。保護者もこのアイデアを受け入れてくれるかどうか。今のものをちょっといろいろ変えたいと思っているので、みんなが受け入れてくれるかどうか。ちゃんと全部やりたいから、ちゃんと全部できるかどうか。一人だけで変えるのは無理なので、みんなでやりたい。全部やるのは無理なので、変えられるところから。みんなが受け入れてくれなくても、少しだけでもいいからやってみる。最初は受け入れてくれる人が少なくても、あとで増えてくるかもしれない。この研修に参加した時、最初は不安がなかったが、今不安があるのは、スパイラル研究がいいシステムだと思うから。ちゃんと実現したいと思うから。実現するためにはいろいろな問題に直面する。自分がちゃんとできないことに心配している。

・ラナさん（R グループ）

幼稚園の目的は子どもの主体性、協力を育むことであり、自由であること。エジプトには KJ1 と KJ2 があり KJ2 は 4 歳と 5 歳に読み書きを教える。同じクラスに 4 歳と 5 歳の両方がいるので教え方が難しい。

エジプトで行いたいのは教科に特活を取り込むこと。一つの授業だけではなく、どんな科目でも取り組みたい。遊びで教えること。やりながら学ぶこと。教師が「私が言ったことをやってください」、「これを書いてください」というのではないアプローチ。具体的なアイデアはまだないが、同僚の先生と話し合ってやっていきたい。

実は今、自分のクラスで遊びの時間に、「これで遊んでください」と言うのに、それに従わない子どもがいる。その子は絵が好き。年齢でクラスを分けられないので、全員である一つのことをやるしかなかった自分にとって、その子は面倒くさいと感じていた。でもエジプトに帰ったら、そんなことはしない。やりたいことをやらせる。子どもがやりたいことだったらそれを薦めた方がいい。その結果全員一緒ではなく、グループに分かれることになっても、自分（＝教師である自分）がここを見て、ここを見て、という風に、頑張ってやるほうがいい。

学校行事には保護者の参加が必要。エジプトでは保護者が参加する行事があまりない。保護者との会議はあるが、あまり来ない。保護者と話し合う会議が増えてほしい。

教員同士のふり返りがあったらいい。そこでは正直に何でも話し合うことができ、何かを意図的に隠すことがないようにしたい。なんでも情報を共有できたらいい。自分だけの情報になったら、その人がエリートになる。それは避けたい。

・サラさん（Q グループ）

FLIA（＝附属後期課程の生徒のグループ）の昼休みのポスター発表は素晴らしかった。生徒たちは OECD の言っていることを、ただそのまま言っているのではなく、自分たちのアイデアを活かして、OECD のアイデアを発展させるために計画し実践している。素晴らしいと思った。

教員のスキルも発展させないといけない。子どもたちが自分たちの力を発展させるためには、教員がどのようにファシリテートするのか、管理職がどのようにリーダーシップをとるのか、教員全員の役割が大事になってくる。私は教員として、校長と教頭の役割が分かった方がよいと思う。今、自分の学校の校長がここ（マネジメントコース）にいて、同じ経験をしている。ここに教員（自分）と校長がいるが、その間に教頭がいる。自分たちの考えや

計画を、帰って教頭と共有したい。

アクションプランとしては、ぜひ子どもと教員と保護者が参加する行事を行いたい。エジプトでは教員と保護者は関係があまりよくない。保護者は子どものことを常に心配している。長い計画を立てると結果がすぐに見えないので、保護者の反応が心配。長い計画にもとづく行事に取り組んだ方がいいのか、やらない方がいいのか。これからの保護者と教員の関係にもよる。

幼稚園の子どもが本を借りていたのがすごい。幼稚園児なのに本を読むのかと思った。10 年後また日本に来たい。エジプトに帰ってこの研修を活かして自分たちが取り組む教育が、日本の先生にどのように見えるかをぜひ聞きたいから。

Cycle2 をふり返って

「協働探究の長期的な展開プロセスとそれを支える教師の専門職学習コミュニティ」を考え進めることを中心としたサイクルであった。今こうやって当時の記録をもとにその過程を辿りなおしてみると、Cycle0 と 1 における学習の積み重ねがあるものの、かなり角度のついたテーマであり、提案だったと思う。本研修は柳沢先生が日々の先生方の様子を見ながら、そしてグループに入っている私たちの話を丁寧に聴き取りながら、全体と細部の調整のなか、状況を読み、ぎりぎりのところで判断し方向性をつけてくださっている。今、この記録を書きながら、もしかしたらこの時、柳沢先生はこの提案をすることに、ある種の緊張感を持っていらっしゃったのではないかと想像している。

クロスセッションでの先生方の語りにもあるように、これまでエジプトの先生方（それは日本をはじめ世界の学校の先生方もそうであると思うが）は、毎日の 1 時間 1 時間の授業をどうすればいいかに悩み、また、子どもたちに正しい知識を教えること（伝達すること）に一生懸命取り組んでいらっしゃった。その教育は先生方（に限らず私もそうである）が受けてこられた教育そのものであり、その長い経験のなかで育まれた学習観や教育観は、例えるならば、重い鎧のようなものであると思う。その鎧に気づくこと、そしてそこから新しいパースペクティブを掴むためには、自分のこれまでの学習や教育、そして今自分が行っている学習や教育をクリティカルに捉えること、そして新たなパースペクティブを得るために考え進め、その転換のための行動計画を立てることが必要となってくる。

この Cycle2 では、子どもたちの長期の協働探究の学習プロセスを展望すること、そのことと連動しながら自分たち（教師）の長期の協働探究の学習プロセスを展望すること、さらにはそのための教師の専門職学習コミュニティを培うことを展望すること、いわば三重の取り組み（三重の学習構造）を提起している。私は、先に少し触れたように、20 代半ばに一度大きな学習観の転換を経験している。その時のことを思えば、自分が着ている「鎧」に気づくだけでも大変であった。また、気づいても、鎧を着たままの方が楽だとさえも思った。しかしながら、エジプトの先生方は、ご自身の学習観と教育観をダイナミックに変容させている。もちろんそこに葛藤が伴われていることは、先生方の語りを見ても明らかである。EJS の先生方は多様な実践や新しいアイデアに出会いながら、そして葛藤しながら、ゆっくりと三重の学習観を掴み、展望を切り拓いていっている。そうした先生方の学習過程を今辿りなおしながら、改めて、EJS の先生方は教育者でありプロフェッショナルだと感じている。

Cycle3 学校づくり・専門職学習コミュニティを培うマネジメントの長期展望（グローバルな協働へ）

Cycle3 では、Cycle2 までに考え進めてきたことを活かしながら、学校づくり・専門職学習コミュニティを培うマネジメントの長期展望を拓いていくことがテーマであった。私が 2/18（月）と 2/19（火）の午前を欠席したため、その部分の記述が弱いことを予め断っておく。

2/18（月） 長期的な展望を拓くための事例や提起に触れる

先週末（2/15～17）、福井大学にて「実践研究福井ラウンドテーブル」が行われた。2/16（土）のプログラムには、エジプトの先生方（希望者）が一部参加した。当日私は運営側にまわっていたため、先生方に同行できなかったが、3 日間で 930 名にものぼる国内外の実践者が、そして子どもから大人までもが実践交流をする場に立ち会い、EJS の先生方は何を感じられただろうか。すでに伊那小学校で公開研究会の様子を見てその価値を感じ取っていらっしゃること、またこの間長期の探究においてクロスセッションによる中間報告が大事であることを掴んでいらっしゃることから、ラウンドテーブルの役割や重要性も、きっとご自分たちなりに捉えたに違いないと思う。

この日は、午前はラウンドテーブルのふり返りおよび、附属後期課程の牧田秀昭副校長から「教師を育てる学校マネジメント」に関する提起と、福井県教育研究所の森田史生先生から「福井県の教員研修マネジメント」の紹介を

いただいた。そして、午後は午前の提起や事例を踏まえながら、教師の専門職学習コミュニティを培うことに向けた示唆を得るため、ウェンガーの『Cultivating Communities of Practice』を読み進めた。

2/19（火） 立場の異なるメンバーの考えやアイデアに触れたくなる

この日の午後、EJS の先生方の希望で、マネジメントコースとアクティビティーコースの先生方のクロスセッションが行われた。二つのコースのクロスセッションはこの週の後半に予定されているが、その前に一度お互いの考えを交流したいとのことだった。アクションプランを立てるなかで、特にマネジメントコースの先生方がアクティビティーコースの先生方の考えや意見を聞いてみたくなったようである。学校づくり、専門職学習コミュニティを培うアクションプランを展望する際、多様な世代および役割のメンバーの意見に耳を傾けながら状況や可能性を探る必要が出てくる。このようなリクエストが出てくること、そして先生たちのリクエストを反映させながら研修内容を再構築する経験をさせてもらえていることを嬉しく感じた。以下は、そのクロスセッションでの、私が入ったグループの先生方の語りの内容である。

・ムハンマドさん（C グループ）

生徒、教師、保護者、住民の参加を前提にしたスクールプランをつくりたいと思った。具体的な目標とそれを実現するための活動も書いた。まずは全体的なスケジュール、それから細部を。日程を含めかなり具体的に考えた。具体的といっても、まだ週の計画ではあるが。最初の週の目標として、子どもたちに記録を書くことを教えたい。

子どもたちの Agency を培う教育、例えば 3 ヶ月かけて、子どもたちがとうもろこしを育てるプロジェクトを考えている。3 ヶ月でそれを行うにはちょっと大変になるかもしれないが、先生たちと毎日会議をしてふり返りを行う。日本で見学に行った学校の取り組みをモデルにしているが、自分なりに工夫した。記録を教えることを大事にしたいし、ここで習ったことを他の EJS の校長とも共有したい。

・ムハンマドさん（A グループ）

子ども、教師、保護者、住民のための学校づくり。今回の研修では自分の学校の教員は来ていないため、帰国して自分がここで学んだことをもとに教員向けの研修を行いたい。先生たちが理解してくれたら、先生たちが自分たちのクラスでコミュニティ・オブ・プラクティスがつくれるように、活動を通じた学習を提案したい。3 月はとうもろこしを育てるのにいい時期。とうもろこしづくりを行い、保護者へのワークショップを計画する。学校で何が起こっているのかを伝えたい。エジプトは特活の時間だけがあり、英語などでは普通の授業が行われている。特活は理念だということが分かったので、全部の時間に取り入れたい。

（附属のような）学年プロジェクトをつくりたい。そのために、いろいろな教科を交えた先生たちの学習グループをつくり、そこで教科の共通点を見出してもらい、それを子どもたちのプロジェクトに活かしてもらいたい。例えば、とうもろこし作りだったら、算数や理科で共通点を見つけ学年プロジェクトにすることができる。教科書にあるから勉強するのではなく、プロジェクトをベースに、それを発展させるために教科書を使う。すべての学習を学年プロジェクトに連続させることができる。

子どもたちがコミュニティ・オブ・プラクティスを経験し、学校を卒業してもコミュニティ・オブ・プラクティスがつくれるように教えたい。コミュニティ・オブ・プラクティスで一番大事なのは教員、子ども、保護者、住民。4 者の間で協力がないと、コミュニティ・オブ・プラクティスができない。

・レイラさん（P グループ）

「私の世界」というテーマのプロジェクトを行いたい。子どもたちに、自分のまわりにあるものについて分かってもらいたい。「私たちは今どこにいるの？」という質問から始まり、まずは子どもたちが自分の学校を探険し始める。自分の学校についていろいろ考えて、発表して、ふり返り。次は自分の県、次はエジプト、次は世界へと広げたい。グループに分かれて、例えばイタリアや日本について発表する子どもがいてもいい。KJ1 では世界地図を学ぶ。そのなかでいろいろな活動、例えば外国人が来たらどうやって案内するのか、招待状をつくることもできる。これらを実践するために問題だと思っているのは、保護者の人たちの理解や協力が得られるかどうか。

・ナーヘドさん（Q グループ）

EJS にある「感謝の日」に至るまで、いろいろな活動ができる。3 月には母の日、4 月は孤児の日、5 月には労働者の日がある。それぞれの日に意味があり、また、別物ではない。3 月の母の日では、お母さんへの感謝と、お母さんがいない子どもたち、孤児の気持ちを想像する。また、

両親がいて働いてくれていることへの感謝と、両親がおらず自分が働かなければならない時のことを想像し、労働を深く考える。そのためには住民の協力がいる。まわりにいる人たち、学校の先生、医者などいろいろな人にインタビューをする。（マネジメントコースの先生より提案：人に対する感謝だけではなく自然に対する感謝も含めたらどうか。そうすると掃除にも関係してくる）。母の日に子どもたちはお母さんの絵を描いたりして、それを感謝の日に展示する。歌や音楽の演奏などもできればいい。

2/20（水）ここまでの自身の探究を最大限記録にしようとする

この日は、明日の「省察的クロスセッション」に向け、終日記録を作成した。先生方は非常に熱心に取り組んでおられた。それは先生たちが記録の意味やクロスセッションの意味を、経験的に十分知っているからであると感じた。

2/21（木）立場の異なるメンバーがここまでのお互いの探究を交流し、そこからEJSの長期に渡る展望を協働で拓こうとする

福井サイクルにおける大きな山場となる「省察的クロスセッション」の日である。先生方の表情には、少し改まったような緊張しているような様子が感じられた。マネジメントコースとアクティビティーコースの先生方のクロスのグループで、改めて、福井で考えたことや、エジプトに戻ってからのアクションプランをじっくり報告してもらった。10 のグループに分かれて行ったが、ここでは私が入ったグループ 4 の先生方の報告を紹介する。メンバーは報告順で、ヤーセルさん（マネジメント・A グループ）、ハーガルさん（アクティビティー・P グループ）、ヤスミンさん（マネジメント・B グループ）、オムニアさん（アクティビティー・P グループ）、ユスティナさん（アクティビティー・Q グループ）である。また、このグループには、福井大学連合教職大学院の中川美津恵先生、通訳のアーヤさんが加わった。以下、アーヤさんの通訳により知り得た報告内容である。

・ヤーセルさん（マネジメント・A グループ）

日本の学校における経験と母校（ESJ）の展望について書いた。日本の学校では、プロジェクトベースの学習に最も驚いた。教師だけではなく保護者もこれらのプロジェクトにかかわっている。先生がすべてをコントロールしているわけではないことに気づいた。その役割はファシリテーターであった。先生たちは生徒の学習プロセスを促進していた。また、生徒たちは批判的に考える力を育んでいた。日本の教育は、問題解決学習に焦点を当てている。そこで生徒は様々なスキルを学んでいる。授業では、教師はカリキュラムをカバーするだけではなく、生徒が様々なスキルをつけていくことを助けている。私は何人かの先生が、生徒の関心を引くために PC を使っていることに気づいた。テクノロジーが学校にも取り入れられている。校長は学校全体のプロジェクトを監督している。校長は生徒たちが幸せであるかをいつも確認している。私も EJS に通う生徒たちを幸せにしたい。

私の世代の学校での勉強は面白くないものだった。しかし、私たちは新しい世代のために、学校での勉強を楽しくしなければならない。以前、状況を調査することなしに教師になることはできないと誰かが私に言った。物事の調査は、教師にとって非常に重要なもの。教師は学ぶことをやめるべきではない。すべての先生が授業研究に参加するべきである。

この研修において、教師の役割は教える者からファシリテーターへ、そしてカリキュラムの目標も自分のなかで変化した。子どもたちに情報を教えるのではなく、多様なスキルを身につけること、教科書を勉強するのではなく、教科書を通して学ぶこと。遊ぶことを通じて学んでいる日本の子どもたち。記録も重要。EJS の先生は、学校での出来事や子どもの様子を記録にする練習が必要。

アクションプランは、自律した学習者を育てること。それを実用的にするために、3 ヶ月の短期のプランを立てた。そのなかには先生たちへの説明の方法と、様々な特別活動、評価方法、ふり返りの会の計画がある。子どもたち主体の学習、先生たちの授業研究、保護者の役割、そしてテクノロジーの使用における重要性にも触れている。

他のメンバーからのコメント（ヤスミンさん）：私はヤーセルさんと経験を共有しており、言っていることがよく分かる。私の学校には、教師用ガイドブックに従っていない先生がいる。しかし彼女はとても独創的な活動をしており、自分はこの先生は非常に才能のある想像的な先生だと思っている。授業は 90 分。子どもは賢い。様々な活動をし、カリキュラムを学ぶのに十分な時間がある。

・ハーガルさん（アクティビティー・P グループ）

私は特活が総合的な学習方法であることが分かった。レポートにはすべてを詳細に書いた。レポートは 2 つのパートから成る。最初のパートは私たちの実践的な経験

について、2つ目のパートは、このプログラムを通じて習得した理論的な知識について。前半では、まず金沢小学校の訪問について書いた。子どもたちが活動を通じて学んでいるのがよかった。子どもたちは一日中いすに座っているようなことがない。また、日本の幼稚園の子どもたちはペンや紙を通して学ぶことがない。遊びやゲームを通じて様々なスキルを身につけている。

私は先生が教室で環境に優しい材料を使っていることに気づいた。子どもたちはそれを使って活動している。福井市森田小学校についても書いた。EJSと共通するところも見つけた。スポーツイベントやボランティア活動がとても良いと思った。

この研修において、授業研究と授業研究における様々なモードを知ることができた。私は自分のレポートで授業研究の各モードを説明した。エジプトで様々な授業研究モードを適用したいと思う。特活についての様々な資料も読んだ。このことで、特活が何であるかの理解を深めた。また、実践コミュニティが何を意味するのかを理解した。実践コミュニティは、教師、子ども、保護者、ボランティアを含むものである。

日本の学校は、量ではなく質を重視している。EJSは明確なビジョンを持っているが、まだ体系的なシステムがない。私は、スパイラルダイアグラムを考えた。そしてアクションプランでは、それをEJSのカリキュラムに取り入れることを試みた。私は一晩中アクションプランを考えた。いろいろなことを考えた。例えば、砂漠地帯と農業地帯の違いを子どもたちに気づかせる方法など。また子どもの保護者のためにも、いくつかのアクションプランを考えた。私は保護者が、先生と一緒に子どもの学習過程に没頭して参加することを望んでいる。地域社会にも様々なイベントに参加してほしいと思う。子どもたちに遠足をしてもらいたいので、それもアクションプランに加えた。

教育環境についても考えた。アクションプランに、健康的な学習環境をつくるという目標を追加した。このアクションプランの評価方法としては、アクションプランを評価するための反省会の実施を考えている。

他のメンバーからのコメント：今回の研修では、ハーガルさんの学校からは、ハーガルさんしか参加しておらず、校長が参加していない。これまで撮ったビデオや写真も活用しながら、校長と経験やアイデアの共有をすると良いのでは。

・ヤスミンさん（マネジメント・Bグループ）

まず自分の印象をみなさんと共有したい。私はここで見た探究プロセスが本当に好き。探究プロセスにおいて最も重要なことは、そのためのフレームをつくること。スパイラルな学習方法が好き。

たくさんの特別活動に驚いた。最も興味がそそられた活動は学P（＝学年プロジェクト）だった。私はエジプトで、今すぐ学Pの実践がはじめられるとは思っていない。簡単な活動からはじめる必要がある。福井大学附属学園で校長の話を聞いた。私はレポートに実践コミュニティについて書いた。学校の校長でさえも、誰もが学び続けるべき。私は6年生の子どもたちが2年生の子どもたちをどのように歓迎し、また出会うかを見た。小さな子どもたちはとても幸せそうだった。学校が社会のようだった。誰もが誰をも尊重している。先生たちはお互いから学んでいる。

私は日本の学校の、清掃への参加の仕方が好き。先生も子どもが学校を掃除するのを助けている。

エジプトでは保護者をもっと関与させる必要がある。ここで撮った写真を見せたい。

伊那小学校にも感動した。いくつかのプロジェクトは、完了するまでに何年もかかる。学校は将来のビジョンを持ち、活動のすべてがつながっている。

私のEJSの学校は、大学とつながるのに役立つと思う。附属学校のような存在になれると思う。1年を通じ子どもが学校行事の準備をする。イベントの直前だけではない。私はエジプトの先生が、子どもにそうさせることができると思う。

私のアクションプランとしての教育ビジョンは、リーダーシップスキルと、様々な人と協力する能力を持った子どもを育てること。先生の役割や協力も大切。学校の事務を文書化し、様々なクラスについて話し合い、子どもの問題について話し合い、授業研究、リフレクションセッションの開催、リフレクションセッション後の改善の確認などを行いたい。校長は教師を支援する役割。各活動には、活動を評価できるよう明確な目標を設定する必要がある。

・オムニアさん（アクティビティー・Pグループ）

レポートには、最初に金沢小学校の訪問について書いた。歓迎してくれて嬉しかった。私は何人かの子どもの手仕事を見た。私はかれらが使っている材料に感銘を受けた。すべての材料は環境に優しいものだった。私は子どものプレゼンテーションを見た。そのプレゼンテーションの間、すべての子どもが注意深く聞いていた。一般的に、

子どもたちが丁寧な声で話していることに気づいた。また、すべてが文書化されていることに感銘を受けた。先生は動画を使って子どもたちに教えていた。子どもたちの遠足の写真を見た。

伊那小学校では教師同士で経験を交換するための研究会を開いていた。伊那小学校では、伊那の環境条件でよりよく生きる子どもを育てることに焦点を合わせていた。私は子ども同士の集会を見た。この会議で、子どもたちは将来の夢を共有していた。先生は子どもに目標と夢の違いについて尋ねていた。子どもたちはその違いをブレインストーミングし、自分の目標と夢について考え始めた。

私たちはこの研修において、幼稚園を訪問した。子どもたちは自由遊びのなかで学んでいた。走り回り、自由に遊ぶことを怖がっていない。先生は子どもたちに、自由に遊ぶスペースを与えている。そのなかで、子どもたちは自分自身で新しいことを発見する。

アクションプランとしては、活動として、EJS で子どもたちが自分の作品を展示できるイベントを作りたい。私は子どもたちが先生の助けを借りながら、自分自身でこのイベントが開催できるようにしたいと思う。保護者もこのイベントに参加してほしい。このイベントには地域コミュニティも参加できる。私はエジプトの子どもたちが、花を植えるなどの活動を通して学ぶことを望んでいる。EJS の幼稚園の子どもたちに簡単なプロジェクトを作ってもらいたい。たとえそれがとても簡単で単純なプロジェクトであってもいいと思う。子どもたちはそのプロジェクトを通じてたくさん学ぶだろう。先週の福井ラウンドテーブルで見た子どもたちのポスター発表についてもレポートで触れた。私のレポートのタイトルは、「新しい開発を実行することができる新しい世代」とした。

・ユスティナさん（Q グループ）

まず、2 日目に見た金沢小学校のマラソンについて書いた。エジプトにはこのようなマラソンはない。子どもも先生も、見学している私たちに気をとられていなかった。みんな学習に集中していた。私はこの研修のふり返りのセッションを通じて、たくさん学んだ。EJS では、活動の後にリフレクションセッションをするという、この研修と同じシステムを実行したい。

日本の先生は、子どもたちがもっと創造的になる活動を考えている。幼稚園では、子どもたちが時間を大切にしている。私は附属の 1 年生が新 1 年生を歓迎するために主催したイベントが好きだった。1 年生の子どもたちはとてもよく組織されていた。3 年生のクラスでは、ポスター発表もあった。プレゼンテーションの後、子どもたちはお互いに肯定的なフィードバックをしていた。かれらもまた、リフレクションセッションを行っていた。

私のレポートでは、4 つのモードの授業研究について触れた。EJS で様々なモードを実践したい。校長が、どこから始めるのがよいか、いつ他のモードを実行しはじめるのがよいかを決定すると思う。

幼稚園の訪問のすべてに感動した。エジプトの何人かの保護者は、子どもたちが遊びを通じて学ぶことを望んでいる。かれらは子どもたちに新しいことを発見してもらいたいと思っている。しかし、エジプトの一部の親は、子どもたちがペンと紙を通して学ぶことを望んでいる。私は日本の子どもたちがゲームや活動を通して学ぶことに感銘を受けた。私は EJS の校長が保護者と話し、活動を通して学ぶことの重要性を説明するべきだと思う。

日本の幼稚園の子どもたちがひらがなを書いたり模倣したりできることに驚いた。日本の幼稚園の子どもたちは、教室や家のなかにあるものを使って、様々なものを作っていた。私は何人かの子どもたちが簡単な材料でいすとテーブルを作り、レストランを作っているのを見た。また、ダンボールで作られたアクセサリーショップを見た。そして男性教師にイヤリングをプレゼントしていた。小さなぶらんこを作っている子どももいた。彼女はこのぶらんこのバランスをとろうとしていた。その子は成功するまで、ぶらんこのスイングの調整をした。彼女はこの活動を通じてバランスについて学んだ。

アクションプランとしては、子どもたちをグループに分けて、かれらに異なった活動をさせたい。子どもたちが自分たちの活動を、自分たちでコントロールできるようにしたい。

中川先生：エネルギッシュな議論に感動した。それぞれの学校で、日本の学校の良さを取り入れようとしていることが嬉しい。日本の学校は知・徳・体のバランスをとることを大事にしているけれど、エジプトはどちらかといえば今は学力だろうか。子ども同士が学び合うこと、教員も、校長も、地域も、お互いが学び合うことを学校経営に活かしていただければ。

Cycle 4　4 週間をふり返り、今後の展望を切り拓く

研修も残り 2 日となった。この 2 日間は Cycle4 として、この 4 週間を大きくふり返りながら、エジプトで発展的に実践を展開していくための展望を切り拓くサイクルである。

2/22（金） 新しい学習モードを獲得したことへの自覚と、世界を認識し変革する主体的な自己への気づき

この日、柳沢先生から、この間提案されてきた特別活動の将来と、それを実現する三重のアプローチ（reflective spiral アプローチ、weave-up reweaving アプローチ、cultivating community アプローチ）が改めて確認され、さらに分散型コミュニティアプローチが提起された。柳沢先生の提起の最後の一部分を、メモにもとづきここに記しておく。

「この 4 週間のプログラムのなかで、すでにこの 4 つのチャレンジを始めていると思う。私たちはこの間協働探究を重ねてきた。特活を糸口に 21 世紀の教育を展望し、1 週目、2 週目、3 週目とリフレクションを重ねてきた。reflective spiral を実現し、そしてグループでいつもそれを編んできた。様々な意見、様々な議論を編んできた。そしてそれをクロスセッションで他のメンバーとも編んできた。その意味で、私たちはもうすでに Weaving up アプローチに挑戦してきている。それぞれのチームはコミュニティになり、そしてこの 6 つのグループが大きなコミュニティをつくっている。このコミュニティはエジプトの教育改革の出発点を支える大事なコミュニティである。

みなさんのコミュニティは日本のコミュニティとも密接な関係をつくってきた。様々な学校を訪ね、それをエジプトの教育に結びつけるコーディネーターの役割を果たしている。もうすでにグローバルコミュニティが始まっていると言える。ウェンガーの『コミュニティ・オブ・プラクティス』の最後の第 10 章、その題名は Reweaving the World、世界を編み直すというタイトル。私たちのこの取り組みは、世界の教育を編み直す重要なスターティングポイントになったと思う。その成果を大事に持ち帰って、お互いの国で頑張っていきたい。」

柳沢先生の提起に、マネジメントコースのアハメドさん（マネジメントコース/ダミエッタ EJS 学校長）より、研修員の先生方を代表する形で、次の言葉が述べられた。「この研修で実践をし、学ぶことができた。提起されたアプローチをやりながら学んできた。単なる研修ではなく、倍の成果が得られたと思っている。単なる講義だけではなく実践を味わうことができた。ご存知のように、初日から私たちは、特活はどこかと尋ねてきた。特活に対してずっと抱いていた疑問やその実施方法に伴う不安が、先生のおかげで解消され、私たちは特活の定義を自分たちのなかから変えようとした。私たちも変化してきた。新しい学習モードになってきた。特活から、世界を編んでいくことへ、それを学んできた。穏やかに変化してきた。火が灯され、それは私たちの実践に芽生えている。この研修に協力してくださった全員にお礼の言葉を言いたい」

この後、翌週（2/25）東京で行われるラウンドテーブルの確認とその準備を行った。これまで先生方は非常に深い探究を行い、非常に複雑な考察を重ねながら、それを共有するための長いレポート書いてきた。この日は、東京で、そしてエジプトでより多くの人にその考察に参加してもらえるよう、ポスターを作成した。

2/25（月） 次の探究に向け、ひとまわり広いところにいる多様なメンバーに自身のこれまでの探究と気づきを表現する

東京ラウンドテーブルの日。本研修の初日の「三つの種」にも参加してくださった在日本エジプト大使館の方々、JICA の方々、早稲田大学の村田晶子先生、神奈川大学の入江直子先生、早稲田大学のエジプト人留学生らを交え、ラウンドテーブルを行った。前半は、金曜日に作成したポスターを活用したポスターセッション、後半はグループとなり省察的クロスセッションを行った。そして、次の日（2/26）の閉講式をもって研修が終了した。

Cycle3 と Cycle4 をふり返って

本研修期間における終盤となる Cycle3 と 4 では、エジプトの先生方からこの間の学習が跡づけられ、その基盤のもと、短・中・長期のアクションプランがつくられた。そのアクションプランでは、自分たちが見てきた、そして経験してきた協働探究の構造と類似する構造を持つ授業づくり、学校づくり、コミュニティづくりが展望されている。

先生方は今頃エジプトで、どのような取り組みをなさっているのだろうか。きっと最初はうまくいかないことも多いと思う。しかし、それも乗り越えていかれるのだと思う。なぜなら、コミュニティ・オブ・プラクティスが培われるのには長い時間がかかることを先生たちは十分に自覚しており、計画には失敗も織り込み済みだからである。

外から伝達されるのではなく、自分たちのなかから自分たちの教育を考え、変えていくこと。自分たちの手に自分たちの教育の未来があること。この研修で考えたことを、先生方はエジプトで、私は日本で活かし、今後もつながりながら、共に世界の教育改革に貢献できたらと思う。

Ⅴ. 結びに代えて

本稿では、2014 年から現在までの自身の福井大学連合

教職大学院における国際展開の経験を跡づけることを試みた。また、そのなかで、EJEP の研修においては、当時の記録をもとにエジプトの先生方の学習過程を辿ることを試みた。いずれもまだ掴みが弱いことは、自分が一番よく分かっている。しかし、このように国際展開の取り組みを表現できたことを嬉しくも思っている。私のなかでまだ言葉の力が伸びていること、そしてこれからも伸ばしていけそうであるという見通しは、希望にも近いものである。

筆者は、2013 年 10 月に福井大学教職大学院に着任して以降、ずっと言葉を渇望している。そのことは着任後の記録にも書いており（半原 2014）、実に 5 年以上思い続けていることになる。おそらくこの渇望は、ずっと続くのだろう。しかしながら、5 年前はやみくもであったその思いが、今はどんな言葉の力を培いたいのか、その方向性が見えてきている。その力を培うための処方箋はなく、また一朝一夕でつく力でもない。そのため今後時間をかけ、コツコツと磨いていくしかないのだろう。しかし、孤独でもない、と思う。福井大学連合教職大学院の修了生を含む院生およびスタッフ、福井大学履修証明プログラムの公民館主事をはじめとする受講者の方々、福井大学の学部学生、そして国際展開の取り組みのなかで出会ってきた海外の先生方等々、私は省察し探究を続けている人たちのコミュニティのなかにいる。

自分の探究を支えてくれているすべての人たちに感謝すると共に、私も仲間の探究を支えられるよう、そして日本および世界のより良い教育改革の構築を多様なメンバーと協働探究できるよう成長していきたいと思う。

［参考文献］

秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会(2018).『福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち』, 東洋館出版社.

木村優(2017).「中等教育のカリキュラム・イノベーションを支えるプロセス・コンサルテーションの実践―『専門職の資本』と『専門職の学び合うコミュニティ』を培う」, 『教師教育研究』10, 207-229.

高阪将人(2019).「エジプト・アラブ共和国における教育改革の取り組み―教師の専門職学習コミュニティ及び教育環境の現状と課題―」, 『教師教育研究』12(印刷中).

中央教育審議会(2016). 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2019年1月31日取得).

中野重人・高岡浩二編『改訂小学校学習指導要領の展開 生活科編』明治図書, 1989.

長野県伊那市立伊那小学校(2019).『公開学習指導研究会 研究紀要 内から育つ―自分の問いをもって追究し、学びを深めていく子ども―』, 伊那市立伊那小学校.

淵本幸嗣(2019).「福井大学連合教職大学院におけるエジプト教員研修」, 『教師教育研究』12(印刷中).

マグラブナン・ポリーン(2017). *Toward my chosen path: Teaching stories from Philippines to Japan*, 学校改革実践研究報告 No.286, 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）.

モスタファ・ヤスミーン・サーミー・ガマール・エルディーン, 半原芳子（2018）.「エジプトの教員養成・教員研修の現状と課題―サウジアラビアとの比較から―」, 『教師教育研究』11, 29-35.

モスタファ・ヤスミーン・サーミー・ガマール・エルディーン(2019).「エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)研修 1 バッチ目での学びを跡付け、省察する」, 『教師教育研究』12(印刷中).

王林鋒(2019).「省察的実践力を育む国際教育実習カリキュラムの構築と実践―シンガポール国立教育学院教育実習生受け入れの事例に着目して―」, 『教師教育研究』12(印刷中).

半原芳子(2014).「福井大学教職大学院における新人教員の学びのプロセス―半年間の記録に基づく省察から―」, 『教師教育研究』7, 243-258.

半原芳子・柴岡小百合(2015).「福井の外国籍児童生徒の学びを支える―実践の展開を辿り今後の方向性を見出す―」, 『教師教育研究』8, 275-286.

半原芳子(2016).「持続可能な多言語多文化共生社会の構築に向けた協働探究のプロセス―福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づける―」, 『教師教育研究』9, 233-240.

半原芳子(2017).「福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づける―コーディネーターとしての力量形成のプロセス―」, 『教師教育研究』10, 231-239.

半原芳子(2018).「外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける」, 『教師教育研究』11, 225-236.

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会(2010).『学びを拓く《探求するコミュニティ》第1巻 学び合う学校文化』, エクシート.

福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース編(2006). 『学習過程への問い 学習過程研究クロノロジーⅠ 1987-1995』福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース.

福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース編(2006). 『実践コミュニティと省察的機構 学習過程研究クロノロジーⅡb 1996-2007』福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース.

文部科学省(2017). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解

説 特別活動編』, 文部科学省.
柳沢昌一(2010).「アイデンティティの時間 / コミュニティの時間」, 『福井大学教職大学院Newsletter』27, 379.
Christie Abel (2018). *Supporting Collaborative Learning through Lesson Study*, 教員研修留学生研究成果報告書, 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院).
Das Sonaleeca (2019). *Personal Mastery through Team Learning and Visible Thinking: My Reflective Journey as a Japanese Scholarship Recipient Teacher Trainee*, 教員研修留学生研究成果報告書, 福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科(連合教職大学院).
Elizabeth Sugino Hartmann (2017). *Supporting Professional Learning through Communities of Practice: Reflection on the 2016 Knowledge Co-Creation Program*,『教師教育研究』10号, 21-43.
For Global Collaboration Cultivating Professional Learning Communities編集委員会(2018).『For Global Collaboration Cultivating Professional Learning Communities』vol.1 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院).
OECD (2018). The Future of Education and Skills Education 2030, https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf#search=%27OECD+education2030+pdf%27 (2019年1月31日取得).
Oscar Mauricio Rodriguez Estupinan (2018). *Lesson Study, Communities of Practice and Learning: A path for teaching in a reflective way*, 教員研修留学生研究成果報告書, 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院).
Ugyen Dorji (2019). *Reconstructing My Teaching Practices Through Learning from the Japanese Classrooms: An approach to constructivist classroom*, 教員研修留学生研究成果報告書, 福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科(連合教職大学院).
Schön, D.A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books.［柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か』鳳書房, 2007］.
Schön, D.A. (1987). *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass.［柳沢昌一・村田晶子監訳『省察的実践者の教育』鳳書房, 2017］.
Wenger, E., et al. (2002). *Cultivating Communities of Practice*. Harvard Business School Press. ［野村恭彦監修『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社, 2002］.